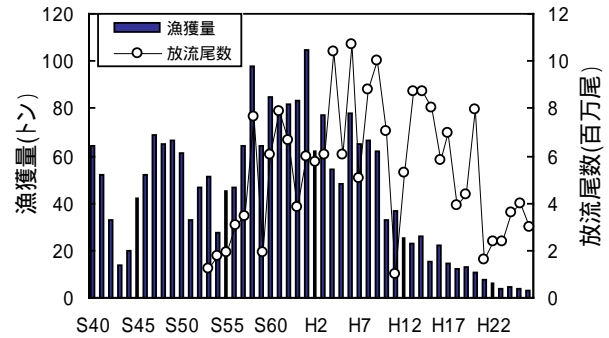


資源添加率向上技術開発研究(クルマエビ)

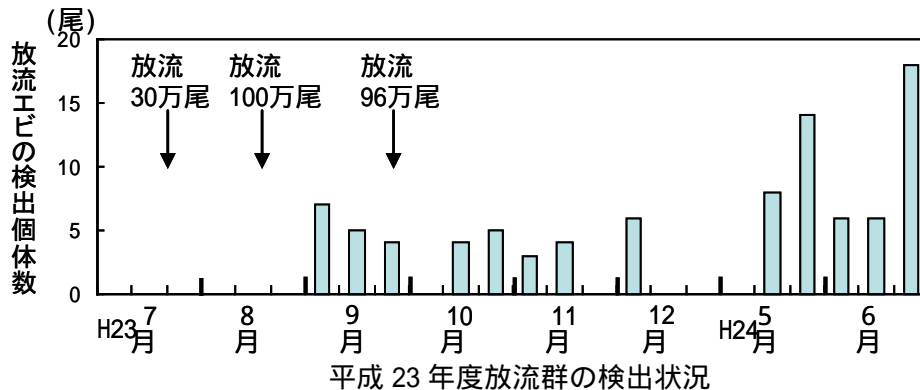
(予算区分 県単独 研究期間 平成 20 ~ 29 年度)
担当：浜名湖分場 山内 悟

【研究の背景とねらい】

浜名湖の重要資源であるクルマエビを増やすため、種苗放流が積極的に行われています。その結果、大量放流以前(昭和 40 ~ 54 年)の平均漁獲量 47 トンが、大量放流後(昭和 55 ~ 平成 9 年)には 67 トンにまで増加しました。しかし、平成 10 年以降は激減し、過去 10 年間の平均は 10 トンにとどまっています。この減少の原因究明と資源増大方法の検討により、漁獲量の増大を目指します。



湖内クルマエビ漁獲量と種苗放流尾数の経年変化



【これまでに得られた成果】

(平成 25 年度までの成果)

- ・近年の月別漁獲量は、好漁期(昭和 55 ~ 平成 9 年)と同様に放流エビが主体となる 6 月にピークがありました。このことから、放流効果は有効であると考えられました。
- ・市場で経時的に体長を測定し、天然群と放流群を分離しました。その結果、平成 24 年の放流群は平成 25 年の漁獲量の 15% と推定されました。
- ・天然稚エビの加入量を定期的に調査しました。その結果、5 月上旬から 9 月下旬の間、長期間にわたって加入していることがわかりました。

(平成 26 年度の成果)

- ・平成 23 年度放流群の放流効果を DNA 解析手法により解析した結果、回収率 0.3%、混獲率 3.2% でした。

【期待される成果】

- ・漁獲量減少の原因が把握され、種苗放流の効果が算出されることから、天然資源の状態や浜名湖の環境の変化に応じた資源量増大手法の開発が期待されます。

【今後の計画】

- ・新たな資源増大方法の検討(平成 27 ~ 29 年度)

現在の中間育成場のある地帯の塩分濃度は、過去の豊漁期と比べて高くなっていることが考えられます。そこで、さらに湖北部を放流適地帯と設定して直接放流を実施し、漁獲量の変化を追跡することにより、その効果を検証します。

(作成 平成 27 年 4 月)